

上下肢変形に対する手術を受けた患者家族の心理的变化～家族へのアンケート調査から～

小笠原 幸枝¹、實平 優子¹、西郷 典子¹、藤木 洋子¹、松村 望東美¹、足立 幸枝¹、本田 千穂²、衣笠 和孜²、青木 清³

¹独立行政法人自動車事故対策機構 岡山療護センター 看護部、²独立行政法人自動車事故対策機構 岡山療護センター 脳神経外科、³旭川荘療育センター療育園 整形外科

【はじめに】当センターでは交通外傷後の頭部外傷後遺症による下肢変形の強い患者に対しアキレス腱延長を行い、術後家族がケアやリハビリに積極的に参加するに至った事例を経験した。そこで上下肢変形に対する手術を受けた患者家族に、上下肢変形に対する思いや手術を受けたことによる心理的变化を調査したのでここに報告する。【研究方法】平成21年6月～平成23年3月にセンター入院中で、上肢及び下肢の手術を受けた家族10名（患者平均年齢22.1歳 男性7名女性3名）にアンケート調査を実施。【結果】回答率100%足部変形による問題点として「立位や座位保持困難」「外見上の問題」が10名、「良肢位が取れない」が8名、「移動時の介護負担が大きい」が6名。家族の手術による心理的变化としては「今後のことを前向きに考えられるようになった」が8名、「在宅等の長期療養に向け安心できた」が5名、「リハビリやケアに参加するようになった」が4名であった。看護師への希望として「他医療職者との連携」が8名、「ギプス・装具のあたりやむくみに対するケア」が8名という結果だった。【考察および結論】上下肢の変形に対し、家族はリハビリや生活上の不都合さと外見上の悲観的な思いを抱いていた。しかし、手術による改善は、家族自身をリハビリやケアに積極的に参加させることとなり、在宅介護をしていく上で大きな自信に繋がったと考える。これは機能回復への希望に加え、家族が残された障害を受け入れ、共に生きていこうとする心の表れではないかと思われる。また、医療従事者は、患者・家族の状況、ニーズを把握し、患者の将来あるべき姿を見据えながら個別的な対応をしていく必要があると考える。